

野長ひとくごと

(24)

齊藤 讓

春日局

毎週日曜日に放映されるN

HKの大河ドラマは、大変な人気番組で、いつも高い視聴率を誇っている。今年も、昨年の「武田信玄」にかわって、「春日局」が登場する。これだけの人気番組であるから、このドラマが視聴者や社会に与える影響は、計り知れないほど大きい。特にいま地方の時代を迎え、どこの地方も地域おこし、町おこしに躍起になっている。だから、もしこのドラマの舞台にでもなろうものなら、その地方は願ってもない千載一遇のチャンスとばかりに、行政も商業主義も一丸となって売り出すのである。一昨年は、「独眼竜政宗」で仙台が燃え、昨年は「武田信玄」で甲斐国山梨が燃えた。

異常なまでの、ご当地観光ブームがそれである。とりわけ記憶の新しい昨年は、「武田信玄」に名を借りて、ありとあらゆる名所が掘り起こされ、名物が生まれ、観光客を呼び込んで、色々な土産物を全国各地に散播したり、信玄の隠し湯が、各所で発見されたといつては、気まぐれな若者をも温泉へと足を向けさせ、各地の菊人形や催物等の出し物は、およそ武田信玄と相場が決まった。また、若尾文子も、毎回ドラマの幕引きの際に語る「今宵は、これまでにいたしとうございます」という一言が、昨年の流行語となったりもしている。商魂の逞しさと、テレビの持つ強大な力には、唯々舌を巻くばかりである。

は、戦乱に明け暮れる戦国の世の群雄割拠の姿を描いた。そして今度の「春日局」は、天下統一が成り、徳川二百七十年の幕藩体制を確立した三代将軍家光が、実弟で後の駿河大納言忠長卿との將軍職継承争いの中で、家光の乳母として果たした破格の役割と、後

説・春日局」を泰流社から発行した一人の女流作家が、この光町に居る。この人は、筆内幸子さんという。白浜の閑の地を終の住処と定められて、かつて東京消防庁の警防部長の要職にあり、いまは悠悠自適のご主人とお二人で、今から三年ほど前に東京から移られて、この地に居を構え文筆活動を続けられている。筆内さんは、歴史小説を得意の分野としておられるようで、作品には、「加賀の千代」、「蓮如上人とその五人の妻たち」、「銭屋五兵衛と千賀」、「北陸の歴史にきらめく女たち」などの力作があり、近々北国新聞に、加賀騒動を主題に連載小説を書き下されるという。実は、私が筆内さんを知ったのは、筆内さんと昵懇の間柄にあり、横芝タクシーに勤務される松尾町の太田栄一さんのご紹介によるものである。燈台下暗しとは正にこのことをいうのであろう。



しかし、お蔭で筆内さんと面識をもつことができ、そのうえ刷り上がったばかりの「春日局」を直直にお持ち頂ける幸運を得ることができた。一気呵成に拝読してみても、多少お年を召された筆内さんのどこに、こんな情熱があるのかと思われるほどの筆の力であり、さすがはプロだと感嘆するばかりである。益々のご活躍を期待申し上げたい。

に大奥を支配し、幕府の政治にも大きな権勢を振った一人の偉大な女性お福の生様を中心に語られていくことである。これからの、ドラマの展開が楽しみである。

さて、ドラマを楽しみにしている皆さんには、映像のみに筋書きを追うだけでなく、是非とも活字を通して一度「春日局」を理解してみることをお勧めしたい。今までは違つて、きつと映像の奥に潜む深い筋書きや、春日局の心が伝わってくるはずである。腹中書あり。読書を勧める由縁でもある。

「春日局」が登場する。これだけの人気番組であるから、このドラマが視聴者や社会に与える影響は、計り知れないほど大きい。特にいま地方の時代を迎え、どこの地方も地域おこし、町おこしに躍起になっている。だから、もしこのドラマの舞台にでもなろうものなら、その地方は願ってもない千載一遇のチャンスとばかりに、行政も商業主義も一丸となって売り出すのである。一昨年は、「独眼竜政宗」で仙台が燃え、昨年は「武田信玄」で甲斐国山梨が燃えた。

「独眼竜政宗」や「武田信玄」

と、このドラマの放映に先だつて昨秋遅く「小

私には、女性には男性になり強かさと粘り強さがあると思つている。今年も、春日局に肖つて社会の表に頼もしい女性が輩出してくることを願つている。